

俺
と
翔
子
と
なぎ@双尾社
Distributed by
まにふいくみやかは

バ
レ
ン
タ
イ
ン



俺と翔子とバレンタイン

なぎ@双尾社

1

「……雄二」
「なんだ？」
「……もうすぐバレンタイン」
「ん、バンアレン帯？」
「……バレンタイン」
「バレンシア」
「……バレンタイン」
「バ、バレ……、すまんネタ切れだ」
「……握力には自信がある」
「ア、アイアンクローはやめてください」
「……バレンタインのチョコレートだけど」
「チョコレートならいらぬぞ」
「……チョコレートより私がほしいということ？」
「そっちはもつといらぬ」
「……チョコレートをもらってくれないなら」
「なら？」
「……婚姻届を学校で公表する」
「そ、それだけはマジで勘弁してください」

「……チョコレートいる？」
「頂戴いたします」

2

坂本雄二は憂鬱だった。
翔子からのチョコレートのことである。翔子のことだ、手作りの恥ずかしいほど大きなチョコレートに違いない。
恥ずかしいだけなら、まだ良い。チョコレートに衣服盛られて拉致され、おきたら結婚式場という可能性もある。ん、薬について考えていたら、体がしびれてきたような気がする。フラッシュバックというやつだろうか。
とにかく、チョコレートを受け取る事態だけは避けなければならぬ。
だが、チョコレートを受けとらなければ、婚姻届が公表される。これまで、明久にだまされて翔子との婚姻届まで作ってしまったが、公になるのだけは避けたい。
この状況を克服するためには、どうすればよいのだろうか。
今日は二月十日。バレンタインまであと四日。
俺にはひとつのアイデアがあった。

二月十二日、二年F組の空気はいつもと違っていた。いつもなら、クラスメイトの雑談で響く教室にも、静寂が教室を包んでいる。雑談に変わり聞こえるのはヒソヒソとした話し声。

「何なのよ、怖いくらいに静かじゃない」

静寂を破って美波が声が響く。

「わしも仲間はずれなのだが、もらえるところかもらえないとかそんな話をしておるようじゃ」

秀吉も首をかしげて答える。

男子たちは何を話しているかというと、

「どうやら、須川がチョコレートをもらえるらしい」

「なに、相手は誰だ？」

「E組の小原田らしい」

「よし、須川をリストに追加しろ」

「俺の幸せを返してくれえ」

普段は使っていない頭脳をフルに活用してバレンタインに誰が誰にチョコレートをプレゼントするかの情報を収集していた。

もちろん、バレンタインに幸せになったヤツは、バレンタイン以外の日に、同じだけ不幸せになってもら

うリストに追加だ。

不毛な行為だと思われるかもしれない。だが、二年F組には、第三の性である秀吉を除けば、姫持参と美波の二人の女子しかいない。

二人のいづれかからチョコレートをもらおうという確率の低い賭けにでるよりも、もらって幸せになるやつをつぶすという作戦なのである。

僕にとつても姫路さんが誰にチョコレートをプレゼントするか、情報を得るためにF組の活動は役に立っている。今のところは有力な情報は内のだけれど。

☆

「アキ、ちよつといい？」

放課後、美波に呼び止められた。

「なに？」

「アキはその……チョコレートは好き？」

体調が良くないのだろうか、頬が少し赤い気がする。

「好きだけど、美波がくれるの」

「だれがアンタなんかチョコレートを」

美波がくれないとすると、消去法で選択肢はひとつしかない。

「僕にチョコレートをくれそうな女子がいるという情報？」

美波はやはり体調がよくないようで、顔をまっかにさせている。

「そ、そうなのよ、葉月がアキにチョコレートを作りたいうて」

葉月ちゃんは、美波の小学生の妹である。美波に似ずたいへんやさしい良い子である。

「チョコレート好みとかは？」

葉月ちゃんが作ってくれるのだから、正直に答えないと。な。

「そうだな、甘さ控えめな感じが好みかな」

「そうね、甘み控えめで作っ……じゃなくて作るように葉月に伝えるわ」

「でもよかったよ、美波がチョコレートをくれるという話じゃなくなつて」

あ、顔が急に真っ青になった。病院にいったほうが良いのかもしれない。

「……どういう意味よ」

急に美波の後ろに阿修羅像が見えてきた気がする。「危険かなと」

見える、僕にも見えるんだ、阿修羅像が。

「ねえ、瑞樹、アキが葉月にチョコレートをもらうつて喜んでるわよ」

なぜ、そこで姫路さんに振るんだ。

「……ふーん明久君、ちっちゃい女の子にチョコレートもらつてよろこぶような変態さんだったんですね」
どことなく、言葉の端々にとげが潜んでいるような感じがするのはなぜだろうか。

「やるわよ」

「はいっ」

最近、姫路さんと美波の連携が、プロレスのタッグのように息がぴったりになっているような。

「私が羽交い絞めになっているので、美波ちゃんは首を前に押し込んでください」

「わかった」

姫路さんそれは、フルネルソンという大変危険な技です。

☆

「それは、さておき」

人を関節技で落としたりしたことをさつくり放置され、話題を変えようとする姫路さん。姫路さん、間違いない黒くなっています。

「葉月ちゃんが、明久君にチョコレートを上げるのなら、私もチョコレートをあけてもよいですよね。」

普段、バカといわれる僕だけど、自分の生命にかか

わる問題には迅速に対処できる。姫路さんの提案から、
コンマ2秒程度で対応を決めることができた。

「う、うれしいよ。ありがとう」

だめじゃん、僕の生存本能。確実に生存できない選択肢を選んだような気がする。

「姫路が、吉井にチョコレートをプレゼントするらしいぞ」

「なに、吉井を血祭りにあげろ！」

いままで、バレンタインの情報収集に当てられていた殺意がすべて僕に向いている気がする。気のせいじゃないよ。

逆に事情を知っている三名は同情的だった。

「よかったな、明久！でも、オレに食わせてたら、殺す」

「よ、よかったのう明久」

「……（ふるふる）」

こうなりや、全員道連れにしてやる。

「姫路さん、F組のみんなも姫路さんのチョコレートを食べたい」

「いいですよ、F組のみなさんにもお世話になっていきますから」

さすが姫路さん良い子すぎる。

「うおおお」

F組男子のボルテージは最高にあがるが、姫路さんの料理の腕を知る四人は、その後展開される地獄を想像して身震いするのであった。

4

「E組に試召戦争を仕掛けるぞ」

放課後、雄二は急に変なことを言い出した。

同級生からも疑問があがる。これまで、F組は打倒A組を目標に戦闘を行ってきた。最初の試召戦争でも、E組とは戦闘を行っていない。

そもそも雄二の目的はA組の霧島さんが持っている婚姻届のほずで、E組との戦闘は無益だ。

雄二が聞いてきた。

「E組とF組の違いはなんだと思う？」

なんだろう、明らかに違うのは。

「試験の点数？」

「試験の点数はもちろんだが、E組はF組よりも圧倒的に女子が多い」

女子と聞いて、急に色めきだす同級生たち。僕はもちろん姫路さん一筋だが、気にならないわけではない。

「つまり、E組の男子はF組よりもチョコレートを手でできる可能性が高い。これは許されざる事態だが事実である」

雄二は続ける。

「そこで、E組に試召戦争を仕掛けて、設備の交換ではなく、E組の女子からF組へのチョコレートプレゼントという形で勝利の代償を得る」

なんて、あくどい作戦なんだ。さすが、元神童だ。「だけど、肝心の気持ちがおもっていないチョコレートでみんな満足できるの？」

「甘いな明久、クラスの反応をみれば分かるだろ」

確かに、クラスのボルテージは高まっている。さすがにF組といったところだろうか。

「戦闘開始は翌一三日九時にする」

クラスメイトたちがうなずく。

「宣戦布告はそうだな。」

「吉井がいいんじゃないか。」

「姫路さんにチョコをもらうようなやつは死ぬ」

みんな姫路さんからもらえるのに、何で待遇が違いすぎるぞ。

「じゃあ、明久要ってきてくれ。では、明日に備えるように」

その後、E組に宣戦布告に行った僕は当然ぼこぼこにされた。

☆

三月一三日九時、E組との戦闘が始まった。

F組の作戦は先手必勝だ。試召戦争に慣れていないE組に対するF組のアドバンテージは点差以上に大きい。そこで、主力部隊をE組正面に重点配置し、一気にE組の代表を倒そうということなのだ。

戦闘開始から五分。F組は優位に戦闘をすすめているようだった。

雄二と僕による別働隊は、特別校舎棟に来ていた。戦闘と直接関係のない、特別校舎棟に来たのは、裏の作戦を実行するためである。

昨日、解散後に雄二からE組との試召戦争の裏の目的を聞き、利害が一致した僕らは協力することにしたのだ。

「で、どうやって作戦を実行するの？」

「当然、お前の召還獣でこわす」

試験召還大会で雄二が入手した、白金の腕輪を利用することで、立会人なしで召還を実施することが出来る。

物質に触ることが出来る、僕の召還獣なら確かに実施可能ではある。

「火薬とかそういうのじゃなくて？」

とりあえず聞いてみる。

「そんな危険なものが手に入るわけないだろ。それともアキちゃん爆弾にするか」

「雄二、どっちにしる僕がやるしかないんだね」

雄二に聞いた僕がバカだった。僕の召還獣は物質に触れるかわりにフィードバックがある。つまり、召還獣でものを殴ればそれだけ自分の拳に痛みが跳ね返ってくるということだ。

だが、雄二の目的のため、そしてなにしろ僕の健康のために仕方がない。

僕は仕方なく自分の召還獣に校舎を攻撃させた。

「おい、お前ら、なに校舎を破壊してる」

担任の鉄人が現れた。特殊教室棟にはめったにこないはずなのに。

「げ、鉄人」

「逃げるぞ」

5

校舎損傷のため、二月十四日を臨時休校とする。

文月学園

俺の作戦は成功し、校舎を壊すことで無事二月十四

日を休校にすることが出来た。

これで、翔子からのチョコレートも婚姻届の公開も同時に回避することが出来た。これが、俺が考えた作戦だったわけだが。本当にこれで良かったのだろうか。なんだか物足りないような気分になり、俺は自然と霧島邸に向かった。

☆

ピンポーン

霧島邸の呼び鈴を鳴らす。

「……雄二」

「ほら、出せよ」

「……なに？」

「チョコレート。学校が休校になったくらいで渡さないつもりだったのか？」

「……ううん、はい」

「ありがとな」

「……こつちこそ」

たまには、翔子にやさしくしてやるのも良いのかもしれない。自分に言い聞かせるように俺は家に帰った。

エピローグ

二年F組は病欠者多数のため学級閉鎖とする

文月学園

三月一六日、二年F組は学級閉鎖された。

十五日に姫路さんが持つてきた手作りのチョコレトが原因であるといううわさが流れたが真相は闇のままである。

あとがき

お手に取っていただいた皆様、
本当にありがとうございます。
そして、

本当に申し訳ありませんでした。
限りなく未完成に近いものを発行
することになってしまいました。

言い訳

今回、初めて文章という形で表
現することにしていました。

当初はオリジナルを予定してお
り、近未来に工科大学を舞台にし
ようかなあと考えていました。と
ころが、設定に無理があるのと、
専門知識の不足、そしてなにより
自分の執筆能力の低さでなかなか
作業が進まず、構想1日+表紙2
時間+執筆?1日で本作を書きま
した。

表紙について

バカテストより霧島翔子です。似
てませんね。前も同じ構図で書い
てるような気がします。

そもそも翔子は姫カットなんで
しうか?いまいちわかりません。
SAIでペン入れしてコミスタ
でトーン&レタリングするはずだつ
たのですが、時間の都合上、SA
Iで仮塗りしたものに
OpenOffice.org Drawで文字を入れ
ています。

SAIでのペン入れは初めてだつ
たのですが、なかなか快適です。

本文について

バカとテストと召還獣の二次創
作です。バレンタインという原作
で実際取り上げそうなテーマにし
たのは良くなかった。

雄二視点↓明久視点↓雄二視点
と切り替えたのですが、明久視点
が長すぎてまったくうまく機能し
ていません。

本文の部分は OpenOffice.org
Writer で書いています。

次回予定について

まにふいくみやはかとしては次
回コミティア83に参加予定です。
その際、習作も兼ね、掌編二つ
くらいの本を出せればと思ってお
ります。

以上、なぎ@カラオケで目が逢う
瞬間歌いたいでした。

俺と翔子とバレンタイン

発行日:2008年3月16日

発行者:なぎ@双尾社

配布者:まにふいくみやはか

印刷:どこかの Kinko's

製本:寒空の下
